

チャネルキャットフィッシュの現状について

1. チャネルキャットフィッシュとは

(1) 生態

和名 : チャネルキャットフィッシュ

英語名 : Channel catfish

学名 : *Ictalurus punctatus*

原産 : 北アメリカ

通称 : アメリカナマズ

大きさ : 全長最大 132cm

食性 : 雑食性 (魚類や甲殻類、植物等)

生息域 : ゆるやかな河川の中～下流域や周辺の水路、湖沼に生息。

繁殖期 : 春～夏



(2) 日本への導入経緯

1971年 : 日本に水産目的で導入

1981年頃 : 霞ヶ浦に導入

2001年 : 琵琶湖 (北湖) にて 1 個体を発見

2013年 : 瀬田川下流にて捕獲数増加

(3) 個体が確認された都道府県

茨城県、栃木県、群馬県、千葉県、埼玉県、東京都、愛知県、岐阜県、滋賀県、京都府、大阪府、奈良県、島根県、

(4) 国での取り扱い

2005年 : 特定外来生物 (外来生物法)

2018年 : 緊急対策外来種 (生態系被害防止外来種リスト)

(5) 滋賀県での取り扱い

「滋賀県外来種リスト 2019」で強影響外来種に選定されている。強影響外来種とは、既に県内に定着が確認されていて、生態系に及ぼす影響が強い外来種であり、魚類では他にオオクチバス、コクチバス、ブルーギルが選定されている。

水産課では、漁業者による駆除活動と水産試験場による調査、駆除のための研究が行われている。

2. チャネルキャットフィッシュによる影響

(1) 在来生態系への影響

チャネルキャットフィッシュは動物食に偏った雑食性で、幼魚は昆虫やエビなどの小動物を、成魚は小魚を主食としている。食物連鎖の上位捕食者として、在来生物や漁業資源に対する食害の恐れがある。また、餌を共有し、棲みかが被る在来生物との競合も想定され、ウナギなどの成長に影響を及ぼすことが懸念される。

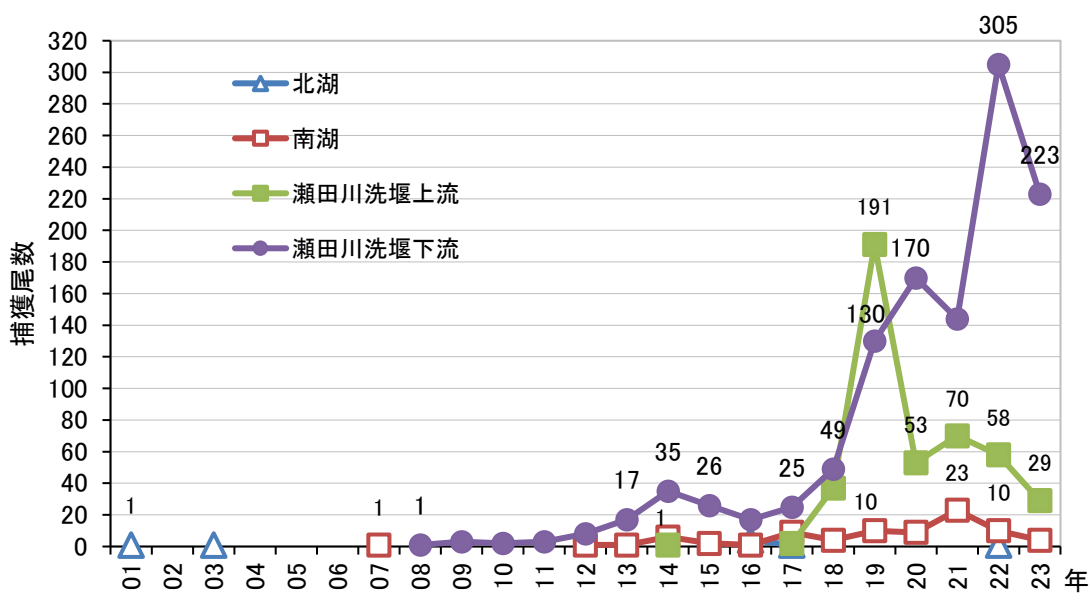
(2) 内水面漁業における人的・産業的被害

チャネルキャットフィッシュはヒレに鋭いトゲがあり、霞ヶ浦では、それにより漁業者がケガをする被害が発生している。

また、同じく霞ヶ浦では、定置網では袋網内で一緒に捕獲されたワカサギやシラウオなどの小魚を満腹になるほど食い荒らす、漁獲物の横取りという被害も出ている。

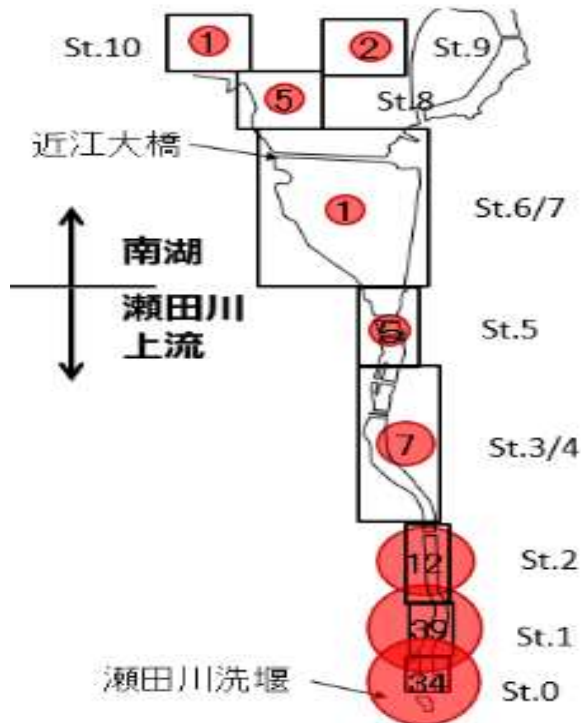
3. 滋賀県でのチャネルキャットフィッシュの捕獲状況

(図1)は、水産試験場と漁業者によるチャネルキャットフィッシュの捕獲数を示している。2001年に初めて琵琶湖で確認されて以降、2013年頃から主に瀬田川で増加している。2022年には過去最多の374個体が県内で捕獲された。水産試験場の調査によると、捕獲場所は瀬田川洗堰より下流側の瀬田川下流が中心であり、2018年頃から捕獲数が急増するとともに、瀬田川上流での個体数も増加し、南湖でも確認されるようになってきている。



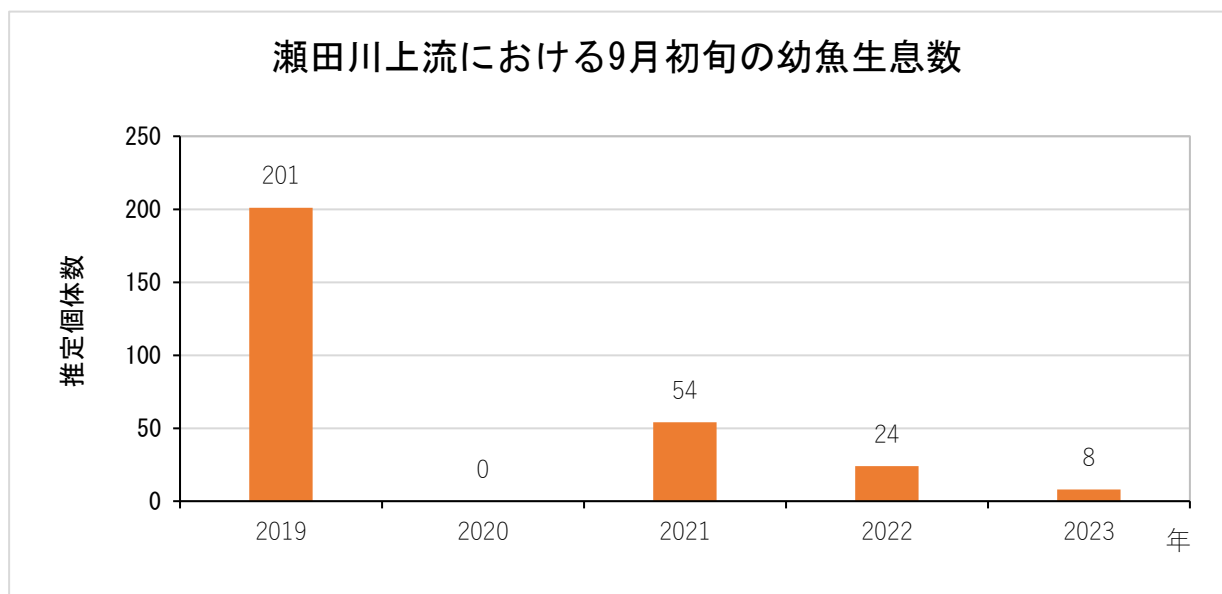
【図1】 捕獲数

(図2)は水産試験場の調査による2018年から2022年の瀬田川洗堰から南湖南部における各調査地点で確認された個体数を示している。瀬田川洗堰付近に個体数が集中しており、南湖でも確認されている。



【図2】調査場所ごとの捕獲個体数

(図3)は水産試験場が毎年の9～10月の採捕量等をもとに、その年の9月初旬の新たに発生した幼魚の生息数を推定したものである。生息数は2019年が201尾と多いが、駆除活動によりその後の尾数は少なく推移している。



【図3】瀬田川上流における9月初旬の幼魚生息数

4. チャネルキャットフィッシュに対する課題

瀬田川洗堰下流において捕獲数が急速に増加していることに加えて、瀬田川洗堰上流でも増加し、南湖でも確認されるなど、分布域の拡大が示唆されている。これらのことから、駆除対策を強化し、個体数増加と生息域の拡大を抑制し、琵琶湖での繁殖を防ぐことが急務となる。漁業被害額は算定されていないが、同種が琵琶湖で繁殖した場合、霞ヶ浦での先行事例からも、水産資源や在来生物を捕食し、琵琶湖の生態系や漁業に甚大な被害を及ぼすことが危惧される。

今後も引き続き同種について情報収集を進め、琵琶湖のレジャー利用の適正化に関する条例に基づく再放流を禁止する外来魚とするか否かを含め、必要な対策を検討してまいりたい。

◇参考文献

- ・環境省「日本の外来種対策 特定外来生物の解説」
- ・国立環境研究所琵琶湖分室「みんなのアメリカナマズガイドブック」
- ・滋賀県水産課、水産試験場「チャネルキャットフィッシュ捕獲数データ他」
- ・滋賀県水産課ホームページ「外来魚駆除対策事業」
- ・片野修ほか(2010)日本におけるチャネルキャットフィッシュの現状. 保全生態学研究, 15: 147-152.